慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 英修道先生を偲んで |
| Sub Title | |
| Author | 松本, 三郎(Matsumoto. Saburo) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1995 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.68, No.7 (1995. 7) ,p.219- 220 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 英修道先生追悼記事 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19950728-0219 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 英　修道先生を偲んで

先生は、明治三十五年一月十七日、東京の東銀座でお生れになった。幼稚舎から大学院まで一貫して慶應義塾で学ばれ、その後恩師及川恒忠教授のお薦めで法学部に残り、以来四十年余にわたり東洋外交史、日本外交史専攻の教授として教育研究に努めてこられた。「塾に二十年間学び、その後四十年余の奉職と合わせると実に六十一年間、これ程長く塾と附合った者はそう多くないだろう」というのが先生の自慢話の一つで、それだけに内に秘めた愛塾心の強さは人並外れたものがあった。

その先生の教育方針の根幹は正に全人教育にあり、塾出身者にふさわしい高い識見と気品に富む良き社会人の育成ということに重点をおかれた。このためとくに課外活動を人間を形成し友情を育てる場として大切にされ、正課の英研究会はもとより、東京文化の会、慶應書道会、国際政経研究会、体育会軟式野球部、三田グリーンクラブといった数多くのサークルの会長を引受けられ、その会員は、「紳士淑女たるにふさわしい見識、容姿、態度の持主」となることを厳しく指導された。当時は、先生の訓戒を小々うるさく感じた学生たちも、いま集まるとそれを懐しい思い出とし、先生を師にもったことを終生の誇りとしているのが面白い。

先生の学術上の業績としては、学位取得論文となった大著「中華民国における列国の条約権益」をはじめ、「門戸開放機会均等主義」「東洋外交史」「中近東外交略史」「明治外交史」「外交史論集」「日本外交史関係文献目録」などの著書と百を超す学術論文がある。これらのうち、やや晩年の著作である「中近東外交略史」では私が、「明治外交史」では阿部光蔵元武蔵工業大学教授（故人）や池井優教授が、そして「日本外交史文献目録」では三人が共同して、先生の指示のもと資料集めなどのお手伝いに全国を駆けめぐったが、綿密な史実に裏づけられた研究成果の誕生するまでの苦労を身を以って教えられたことが懐しい。

先生は学界においても常に指導的役割を果たされ、日本国際政治学会の第二代理事長を務められたほか、国際法学会やアジア政経学会においても中枢的理事を長く務められた。昭和四十三年秋の岡山大学における年次大会で、神川彦松先生を継ぐ理事長に選ばれた夜の二次会で、大変ご機嫌な先生は

「よし今夜の勘定は全部俺が持つ」と多数の会員に振舞われ、会が大いに盛上ったことも懐しい思い出である。それから二十年余経ち、私が同学会の第十代理事長に選ばれたことをご報告に伺った折、先生には大変喜んでいただき、永年の学恩に少しは報いることが出来たかと嬉しく思った記憶がある。

先生は私にとって仲人であり、また古いことだが、留学から帰って家を求めるまでの一年間を雪ケ谷の御自宅の離れにお世話になったこともありで、公私ともに大恩を忝なくしただけに、九十二歳の天寿を全うされたとはいえ、かけがいのない指導者を失った悲しみと寂寥には誠に堪え難いものがある。しかし、ご葬儀に先立ってお別れを申し上げに伺った折拝見した先生の大往生を思わす穏やかなご尊顔は、いかにも「吾れ送り来たりし人生に悔なし」と語っているかのごとくで、生者必滅の人生、終りは常にかくありたいと、私は心の中で深く会得するところがあった。

法学部客員教授　松本三郎

## 英　修道先生を偲んで

英先生急逝の報を受けたのは、ワシントンであった。ジョージ・ワシントン大学で、「日本の外交」「国際関係の中の東アジア」を集中講義するため訪れていたのである。国内であればどんな無理をしてもとんで帰り、お通夜・告別式に参列したのに、ワシントンとあってはそれもかなわず、令夫人への弔電、ご子息への電話で哀悼の意を表するしかなかったことは、今日でも心苦しく思っている。

英先生との出会いは、大学四年の夏、昭和三三年に始まる。当時、林烈助教授の議会政治のゼミに所属していたのだが、就職活動の時期を前にして、英先生に大学院に進学し、大学に残らないかとのお勧めをいただいたのである。お宅に伺い、私の成績、家庭環境、外交史という学問の性格、将来のこと、延々二時間にわたってお話しいただいた。帰宅して母に相談すると、大賛成してくれた。父は、伝染病研究所で結核を研究対象とする医者であった。医学博士の学位をとり、これからという時に自分が研究対象としていた結核に侵され、母と